

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	特定非営利活動法人コミュニティアートセンタープラッツ	
施 設 名	豊岡市民プラザ	
助成対象活動名	人材養成事業	
内定額(総額)	674	(千円)
公 演 事 業		(千円)
人材養成事業	674	(千円)
普及啓発事業		(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	アートスクール2018 SESSION I/SESSION II	7月31日・8月1日/ 9月13日～19日	舞台専門家講師による舞台講座 講師：扇田拓也、田中伸幸、藤田赤目、吉本有輝子、乳原一美	目標値	100
		城崎国際アートセンター/ 豊岡市民プラザ		実績値	73
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	100
				実績値	73

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

豊岡市民プラザは2008年から地域文化講座と題し、舞台芸術の専門家を招へいし、舞台制作について・地域の劇場の役割等、座学を中心とした講座を開催してきた。2015年からは、より実践的に学ぶことができる舞台講座として、舞台技術講座とリーディング講座を掛け合わせたものを開始した。継続することで内容はレベルアップしていき、2018年には、市民劇団が演じる演劇公演として成果発表を行うことができた。

市民や他地域の劇場職員、教員、学生などが受講し、講師や参加者と交流しながら、自身が専門的知識やスキルを身につけることで、意識や力量を高めることができた。

2021年には豊岡市に、観光とアートに特化した国際観光芸術専門職大学(仮称)が開学予定であり、アートを学びたいという若者が増えてくると予想され、また2019年より、豊岡国際演劇祭の計画も始まる。

当施設がこの講座を始めた背景は、このような大学の開設、演劇祭の開催やアーティストの公演等、先進的な舞台芸術による地方創生が進む中、そこに住む市民との隔たりを緩和し、市民と舞台芸術をつなげる劇場として、市民文化活動を柱とする私達が最前線に立ち、アートスクール事業のような舞台創造を通じた人材育成事業を行うべきだと考えたからである。講師陣は、このような施設の役割や地域の文化情勢などを理解していただいております、継続して指導して下さる方が多く、打ち合わせを綿密に重ねて計画的に講座を進めることができた。

会場についても、市内の他の文化施設でも開催することで、地域の文化施設職員との連携を図ることを目指した。

課題としては、若い世代の参加や地域の文化施設職員、行政職員の参加の増加を促すために、企画内容の見直し、募集や宣伝方法の改善の必要がある。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

今回のアートスクールでは講師に舞台芸術分野の第一線で活躍中の講師をお招きし、密に指導を受けることができた。短い期間ながらも、ただ舞台技術を学ぶということではなく、一つのテキスト作品を舞台化するということを想定し、音響・照明・舞台など様々な観点から想像力・創造力を伸ばし、総合的に学ぶことができた。創造力を発揮できるような舞台セットにも工夫を凝らし、作品としても質の高い公演を開催することができた。

受講生のアンケートなどからも、講座に参加したことで、地域の劇場や学校など、今後の仕事や文化活動においての参考になり、充実したものであったとの意見が多くあった。指導して下さる講師陣からも、舞台芸術を総合的に学ぶことができる講座内容・企画に対して高い評価をいただいている。

アートスクールの内容も、開催当初はリーディング講座と舞台技術講座の掛け合わせという内容であったが、徐々にレベルアップしていき、今年度は市民劇団の協力のもと、演劇作品のクリエイションにおいてプランを考え、観客を入れての公演を行うという内容になった。継続していくことで成果発表としても徐々にレベルが上っていると考える。

アートスクールのような舞台芸術を総合的に学ぶことができる人材育成の講座は大変意義のあるものであり、そういった学びの場を求めている人が多くいることも分かった。

舞台芸術の力を、地方創生に活かしていく豊岡市の重点施策の中で、現場を支える人材の育成は、必須急務であり、文化施設職員や市民スタッフの力量・センスを伸ばしていくことが、切実に求められる中、この人材育成事業は、質の高い、実践的演習として高い意義を持つと考える。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

●有能な企画・運営職員ならびに舞台・ホールなどを運営する専門的なスタッフの育成と力量のアップ
アートスクール事業を主催する側として、講師陣と打ち合わせを重ね、どうすれば受講者により充実した学びの時間を提供し、舞台芸術の素晴らしさを味わい自らの感性や力量を高めてもらえるかを、講師から助言をいただくことで、企画・制作者として、今後の企画を進める上での力となった。

講師との交流やプラン作成・仕込み・オペレーションを参加者とともに学ぶことで、知識の再構築やスキル向上につながった。

●地域の文化芸術を担う人材の発掘・養成

一般市民も広く募集し参加してもらうことで、プロの講師と交流し、舞台作品創造に触れ、劇場を身近に感じてもらうことができた。高校生や大学生の若い世代にも参加してもらう事ができた。

さらに、劇場職員に加えて、日頃から当施設のスタッフクラブとして活動している市民も積極的に参加し、講師の指導を受けたことで、知識の定着、技術スキル向上となり、今後の劇場体制として、アーティストや劇場を利用する市民のニーズに応えることができるスタッフの充実につながった。

こうした市民の参加が、地域を豊かにする文化芸術創造活動を担う市民リーダー層の構築につながると考える。

●行政職員、他地域の文化施設とのネットワークの構築

神戸、鳥取等の他地域の文化施設の職員や県下の教員など、様々な分野の方が参加し、グループワークでコミュニケーションをとりながら舞台芸術について学ぶことができた。講座の後に交流会を開催し、講師や参加者同士の意見交換・情報交換の時間をけたことにより、互いにネットワークの構築につながった。

一方、地域の文化行政職員の参加がなく、文化芸術を通して創造性豊かなまちづくりを目指すものとして、地域全体、自治体の目的意識の向上が課題として残った。また、主催側の募集の仕方に、より工夫をする必要があることを感じた。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

今年度のアートスクールは、講座を2期制にし、SESSION Iは平日の2日間、SESSION IIは土日祝日を含む5日間の開催とした。SESSION Iは参加対象を劇場職員や文化芸術に携わっている方を主としたため、仕事でイベントが入りやすい休日を避けた2日間としたことにより、他地域からの劇場職員や教員などが参加できた。

また、去年は1日の講座であったため、時間が足りずプラン作成や意見交換の時間があまり取れなかったが、今回2日間に増やしたことにより、プランを推敲する時間やグループディスカッションの時間を多く設定することができ、より中身の充実した講座にすることができた。他地域からの参加も含めた劇場職員対象の講座は、2日間の開催がベストだと感じた。

SESSION IIでは、計5日間の開催で、最初の2日間は演出講座を先行して行い、題材作品を演じる地元の市民劇団「演劇FACTORY」が演出家からの演出指導を受け、その様子を演出講座受講生は目の前で学ぶことができた。3日目からは舞台技術講座を開催した。一般の参加者についても、高校生や大学が夏休みで帰省中の学生も参加することができた。音響・照明の基礎講座も開くことができ、与えられた課題に対する意見を発表したり、グループディスカッションの時間も十分に確保できた。

また、舞台技術受講者がプランを考える上で、劇団「演劇ファクトリー」に繰り返し演じてもらいそれを見てプランを練り直す機会を設けることができ、より洗練されたプラン作りに繋がった。

さらに、舞台講座講師の田中伸幸氏が、舞台監督の立場として常に他の講師との連携を取り、受講生の進捗状況も考慮しスケジュールを設定していただき、効率的に講座を回すことができた。

事業期間が計画通り最善のスケジュールで実施でき、講師陣の理解により講師謝礼も破格に安価に押さえた。また上演のための舞台費は、広報費を押さえて既存の設備を最大限に使用し、当初の予算内でおさめることができた。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

アートスクールは、舞台芸術分野の第一線で活躍する専門家講師に指導を受け、交流し、集中して学ぶことのできる実践的な講座である。

今年度は、演出講座の講師に、演出家の扇田拓也氏、舞台講座の講師に田中伸幸氏、音響講座の講師に藤田赤目氏、照明講座講師に吉本有輝子氏（SESSION I）、乳原一美（SESSION II）という超一流の講師陣から指導を受けた。

舞台用語の解説や機材の取扱い方法といったことに留まらず、一つの台本を読み解き、音響や照明プランを考える。そこに演出家の意図や演出が加わり、さらにプランをブラッシュアップし舞台化していき、最終的には観客を入れての公演をオペレートするというものである。これは、劇場で働く舞台制作者やテクニカルスタッフ、事務スタッフ、また一般市民の垣根を超えて、誰もが持っている想像力を引き出し、創造する力に変えていくという内容の濃い、そしてレベルの高い講座である。

豊岡市民プラザは、市民参加の事業を柱とし、そこに住む人々の文化活動を充実させ、創造性豊かな地域づくりを目標に、開館から10年以上にわたり様々なプロのアーティストと市民が交流しながら創り上げる事業を行ってきた。

近年では城崎国際アートセンターの開館により、ハイレベルな芸術鑑賞の機会が増え、専門職大学開設や演劇祭の開催など、豊岡市に於いて、今後はさらに先進的な舞台芸術が展開されていくと考えられるが、そこに市民との乖離が起きるのではないかと危惧される側面もある。

そうした状況の中で、我々が開館当初から変わらず行っている、アーティストや舞台芸術専門家と市民、市民と市民、劇場と市民を、地域文化を創造するという形で繋ぐことが、豊岡市民プラザの役割であると考えている。アートスクール事業もその重要な企画の一つである。

また、当施設は、自主事業以外にも、貸館事業が多数あり、創作演劇、ダンス、コンサート、日舞や落語、バレエ、講演会等、様々なジャンルの催しを開催している。アートスクールで舞台制作やテクニカル知識や技術力を向上させ、創造力を養うことは、自主事業の質を向上するだけでなく、普段劇場を利用して頂いている人や、観劇などで来場して頂ける人によりよい舞台芸術に触れる場を提供するとともに、文化活動を行う市民の多岐にわたるニーズに応える力をつけることにつながる。

豊岡市民プラザには、市民による舞台のボランティアスタッフであるスタッフクラブがあり、様々な事業で参加していただき、事業を盛り上げてもらっている。今回一般市民で受講していただいた方が、この事業参加をきっかけにスタッフクラブに入会をしていただき、地域の文化芸術を担う人材の発掘に大きく貢献できた。

また、受講生を2グループに分け、演技・演出は同じだが、それぞれ異なる音響・照明プランの2パターンで成果発表公演を行い、プランの違いで観え方、感じ方がどう変わるのかなどを体験することができ、舞台作品を創る面白さを知ることができた。

こういった試みや、作品自体も演出家の確かな選定・構成された台本と舞台技術講師による指導を受けたプランで彩られた質の高いものであるため、成果発表公演に於いても、もっと観客数も増やして、事業の周知をしていくことも課題である。

また、豊岡市民プラザは豊岡駅に直結した複合ビルの最上階にあり、子育て支援センターも同じフロアにある。そのため、高校生などの若い世代や親子が日常的に行き交う施設である。このような、交通の便もよく、但馬での中心的な立地を活かした事業展開が地方都市の文化創造の担い手として、求心力を持つことになる。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

市民プラザはこのまちに住みたい、ここに生きてよかったと思える、市民の市民のための市民による劇場である。芸術文化による地方創生の実現を重要施策として進めようとしている豊岡市では、「演劇のまち」を目指し、優れたアーティストの来訪が増え、市をあげての文化事業も多くなっている。

JR豊岡駅前に位置し、多くの市民に利用されている市民プラザは、指定管理者NPO法人プラッツが市民活動を柱とした事業運営を行い、地域文化の創造に寄与することをミッションとしている。

この中心市街地にある劇場が、活動の密度、創造性の深まり、作品の芸術的向上に取り組むことで、市民は参加することにとどまらず、手ごたえを得、達成感や、観客も含めての満足感を獲得し、住民の幸せ度が増すと共に、地域の文化芸術の発展につながっている。

市民プラザの劇場機能は、NPO法人による職員の専門的力量的水準持続と発展に支えられており、事業企画の独創性と劇場利用への充実したサービス提供により、地域文化の先導的な役割を果たしている。設置者である自治体の重要施策となった「芸術文化の振興による地方創生」においても、行政と市民をつなぐ民間団体として、中心的な役割を期待されており、市の文化政策会議等の一員として文化シーンに存在感を発揮している。

豊岡市の市広報において、文化芸術特集が組まれた際には、このアートスクール事業が取り扱われ、舞台技術受講生と「演劇FACTORY」の参加者のインタビューが掲載され、さらに「演劇のまち 豊岡」と謳った号においては、トップページの写真にアートスクールの成果発表公演の様子が全面に使用されるなど、地域の文化芸術の発展のための重要な事業として、アートスクールの企画自体の認知レベルも上がってきていると思われる。

また、劇場を拠点とする市民劇団「演劇FACTORY」が、舞台技術講座の素材となる作品に参加協力したことで、事業の成功に貢献し、オリジナル作品に取り組む創造集団としても大いに成果をあげた。劇場のスタッフクラブがスキルアップすることとともに、今後の地域の文化芸術の発展につながる事業となった。地域住民が舞台芸術におけるリテラシーを獲得し、自ら創造活動に取り組み、発信していくことが真の「地域の文化芸術」と言える。このアートスクールはその意味で、地域に根ざした表現者を育成し、また、クリエイティブなスタッフを生み出していくものである。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

今後、文化・芸術のまち豊岡として発展していくためには、なにより市民の文化創造を支える文化施設スタッフや意識ある市民スタッフの育成が喫緊の課題であるが、行政サイドがその必要性を感じていないことが問題である。

豊岡市の文化施設の歴史は昭和40年代中盤に建設された豊岡市民会館（キャパ1200名）からスタートする。貸館を中心とした施設で、自主事業も大部分は地方巡回公演の買取公演であり、それらは座付きの専属スタッフによって運営するため、劇場スタッフとしては開館当初より個人事業者の若手経験者1名がすべての管理を担ってきた。そしてこの状態が35年以上続いて来た。高齢による退職後、舞台スタッフが嘱託職員として数名雇用されたが、専門的知識と技能が不十分のままスキルアップのための研修も少なく、身分の不安定さが重なり、毎年のように人材の交代が見受けられる。このような劇場の人材不足は、同じ地域の劇場で働いている我々豊岡市民プラザも含めた地域全体の問題であり、専門的知識と高い技能を持ち、向上心を持って働くスタッフによる、安定した劇場運営の必要性を常に感じている。

また、2021年開学が予定される観光・文化に特化した専門職大学は、クォーター制を導入し、約半数の期間が実地研修とされており、多くの劇場がその実習の場となることが計画されている。これは劇場スタッフの力量が試される場となり、またスタッフにとっても大きなステップアップの機会となると思われる。これに向けて市内の劇場間のネットワークを構築し、スキルアップのための研修や情報交換など協働意識を確立することが必要である。そしてこれらを行政の課題として取り上げ、市の適切な指導や助成、人的配置がなにより必要である。

今回のアートスクールの狙いは芸術文化を支える人材の育成と、そのネットワークづくりにある。具体的には同一地域の複数の劇場スタッフのスキルの向上と関係性の確立だが、それ以前にそれぞれの劇場のビジョンとミッションについてしっかりと認識しているか、自主事業や貸館においても常に意識した対応を行っているか、甚だ疑問が多いのが現実である。このため、アートスクールを通して職員間の関係性を築くことが非常に重要である。今回のアートスクールは過去の市民プラザの事業に参加してくれた若者や高校生の参加があり、回を重ねるごとに着実に成果は出ているものの、劇場間の関係性の確立には及ばなかった。

豊岡市は演劇のまちを目指すと表明しており、専門職大学の開学も間近に迫っている。このような状況で豊岡市の文化施策担当者をはじめとして各劇場の制作・スタッフの意識の向上がなければ、外部からの人材によってそのポジションは埋められてしまうだろう。

そうならないためには、私達が、市民にとって身近な地域の劇場として、高い専門的知識とスキルを持った劇場スタッフや地域の文化活動を担うリーダー層となる市民の育成を、これからも継続して行うことが重要であり、このような質の高い事業を企画・制作し、発信していくことで、私達自らも、地域の拠点となる劇場として、持続的に発展することができる。